

【農は国の本なり】

第2部・農地転用の闇〔1〕「良い土」狙われ消滅

2009年2月1日



倉庫群に隣接する田を耕す中甲のトラクター＝1月26日、愛知県豊田市で

多額の税金が投下された優良農地が、なぜいとも簡単に埋め立てられ、倉庫群になったのか。まとめて失われた20ヘクタールは耕作放棄地ではない。実績を持つ農業法人が営農しており「こんな例は聞いたことがない」(日本農業法人協会)という。第2部では愛知県豊田市の農地転用にスポットをあて、その経緯を検証する。

「該当なし」

2007年4月、愛知陸運の転用申請に対する国の審査書。耕作者など利害関係者の欄には、そう記された。当時、ナゴヤドームに相当する広い4・5ヘクタールの畑には、大規模経営で有名な農事組合法人「中甲(なかこう)」が育てる麦が、春風に揺れていた。

た。

東海農政局は取材に「中甲と地主の間で、耕作の賃貸借契約が解除されている」と説明した。それが「農地の集団化、農作業の効率化に支障を及ぼさない」という転用への高いハードルを越えた理由。「お金が絡む話。狭い地域でもめ事にはできない」と中甲の代表理事杉浦俊雄(42)は力なく答えた。

杉浦と地主との間でこの数年、繰り返されたやりとり。「そのうち業者がはんこもらいにくるで頼むわ。周りの地主もみんな同意しとるそうだで」。電話口の向こうで申し訳なさそうな声。またか、と思う。トヨタの増産に次ぐ増産。部品倉庫に幹線道路沿いの広い農地が狙われる。判を押し、地主との契約が解除されると、中甲はその農地の「耕作者」ではなくなる。

地主は4・5ヘクタールの農地に11人。大半が3反(0・3ヘクタール)で、愛知陸運から年間約500万円の賃料を手にする。国への転用申請書によると、一部は宅地並みの坪単価20万円、2億2000万円で買収された。「代々にわたり育てた良い土。もったいない」。嘆いても、杉浦が地主に支払うのは3反で年4万円程度。世界企業をバックにする資金力の前に、無力だった。

中甲がささやかな抵抗をこころみたのは、愛知陸運の倉庫が完成間近だった昨年2月。意見交換会に訪れた当時の東海農政局長岩元明久(58)に直接訴えた。中甲の元代表理事らが「歯止めのない転用を何とかして」と倉庫群を指さして言った。

農林水産大臣賞、天皇杯…。30年以上に及ぶ中甲の営農を「成功例」として評価してきた国の対応は期待はずれだった。新たな転用話が中甲に届き、何事もなかったように市や県の審査を通過。中甲の“直訴”について、岩元は「けしからん、と言われるかもしれないが、相談された記憶がない」と取材に答えた。

代表理事の杉浦はトヨタ社員の家庭に生まれ、大卒後、農業に夢を描いて中甲に入った。

「いい農地を奪われ、非効率になる一方。なぜ簡単に転用されるのか分からない」

大臣賞などズラリと並ぶ賞状が飾られた部屋で「米価の値下がりもあって赤字に転落した。何とか立て直さないと」。多額の農業予算の一方、下がり続ける食料自給率。優良法人の苦悩が、そんな農政の矛盾を象徴している。
＝文中敬称略

(第2部取材班・秦融、寺本政司、太田鉄弥)

【中甲】1974年、大規模営農を目指して農民有志が設立した法人。中野、甲村姓が多く頭文字をとった。豊田市高岡地区の農地約350ヘクタールを地主多数と賃貸契約し、組合員ら16人が米、小麦、大豆づくりをする。97年農林水産祭では農業界で最高の「天皇杯」を受賞。成功モデルとして全国的に知られる。

Copyright © The Chunichi Shimbun, All Rights Reserved.